

国士館史関係資料の翻刻並びに補註

第一卷

凡例

- 一 ここには、国士館史編纂のため調査収集された資料のうちから、翻刻・校訂と補註が終了し、重要度の高いものを順次紹介する。
- 一 資料には適宜、通し番号と表題を付し、その下に（ ）で出典を略記した。
- 一 資料は、漢字・仮名遣いとも、できるだけ原本に忠実に翻刻したが、一部に句読点を補い読みやすく改めた。
- 一 現在では読みにくくなった旧字には、平仮名でふりがなを付したが、もともと原本にあるふりがなは片仮名で表記した。
- 一 資料の成立事情及び資料中に使用される用語で意味を解しにくいと思われるものには、簡略に補註を付し、読者の理解に資した。
- 一 資料の翻刻・校訂は、国士館史資料室収蔵の原本ないしは原本から作成した忠実な複製資料によった。
- 一 資料の校訂と補註は、阿部昭が担当した。

一 大正五年六月 青年大民團主旨（『大民』創刊号、大正五年六月）

青年大民團主旨^{*1}

今や内外多事、皇國の隆頽は係つて一つに吾人の雙肩にあり。見よ天下は滔々として輕薄虚偽に流れ、剛健質實の氣風は全然跡を絶ち、殊に似非文明の思潮は益々險惡に、固有の民性は方に地を拂はんとす。斯の如くんば、かけまくも 皇室の尊嚴を傷つけ、延いて皇國の前途を危うせんとす、實に冷汗恐懼の至りならずや。奉公愛國の士、正に蹶然憤起すべきの秋にあらずして何ぞ。是れ吾人青年が國家の柱石となり、勇往邁進せざる可からざる所以なり。顧ふに國家將來の鴻圖を期し、刻苦砥礪以て志操を練磨し、精進向上の實を擧げ、他日國勢を大成するの基礎を造り、皇國をして宇内の宗と仰がしめん事、是れ當さに同志の務めならずや。青年大民團創立の趣旨、亦實に茲に存す。

*1 青年大民團主旨 青年大民團は、社会改良のため青年に自覚を促す文教活動を行わんとして結

成された学生・青年・教師らによる社会啓蒙団体。大正二（一九一三）年四月頃、東京で結成され

たと伝えられる。この「主旨」は、それから三年余り経過した大正五年六月に創刊された青年大民團の機関誌『大民』創刊号の巻頭に掲げられたものである。主旨が作成された時期は、機関誌創刊よりさらに遡ると推定されるが未詳である。草案執筆者については諸説あるが未詳、今後の検討を要する。機関誌『大民』は、創刊号の表紙に、「[THE] DAIMIN」の読みが付されていることから、当初はそう呼称されていたと推定される。しかし、大正六年六月一日発行の『大民』一周年紀年號には、「DAIMIN」の読みが記され、一周年を期に変更されたと推定される。なお、青年大民團そのものも大正八年に國士館の財団法人化、高等部の開設を達成した直後に「大民團」と改称している。

* 2 冷汗恐懼 冷や汗し恐れかしこむこと。

* 3 蹶然憤起 地をけてふるい立つこと。

* 4 鴻圖 大きなはかりごと、目標。

* 5 刻苦砥礪 苦勞し、修養に励むこと。

* 6 志操 かたく守つて変えないみさお。

* 7 宇内の宗 天下・世界の大本、中心。

二 大正五年六月 青年大民團規約（『大民』創刊号、大正五年六月）

青年大民團規約^{*1}

- 一、本團員は、士道の大本に^{ホンドンイン}基き、常に^{ツネ}心身修練を^{シンシンユウレン}怠る可^{オコタ}からず
- 一、本團員は、社會の儀表とな^{ギヒヨウ*3}つて濁世淨澄の任に^{ダクセジヨウトウ*4ニ}當る可^{アタ}し
- 一、本團員は、献身的行動を^{ケンシンテキコウドウ}尊重し、苟も^{イヤシク}輕舉盲動す可^{ケイキヨモウドウ}からず
- 一、本團員は、飽までも^{アク}正義の味方となり、邪悪は^{ジャアク}些も^{スコン}恕す可^{ジヨ}からず
- 一、君國を^{クニコク}思ふの外、他念^{オモ}ある可^{ホカ}からず
- 一、常に^{ツネ}高邁なる志操^{コウマイ}を持し、苟も^{イヤシク}野卑賤劣の言行^{ヤヒセンレツ*5}ある可^{ケンコウ}からず
- 一、學問は^{ガクモン}智徳の精進^{チトクシヨウジン}向上^{コウジヨウ}を旨とし、爵祿^{シヤクロク}の如きは^{*6ムネ}一切念頭に^{*7ゴト}挿^{イツサイネントウ}む可^{サシハサ}からず

青年大民團

*1 青年大民團規約 機関誌『大民』創刊号に掲載された結社の規約である。前掲の「主旨」同様、

成立時期はさらに遡ると推定されるが未詳。これ以後、『大民』誌上に毎号掲載される。青年大民團

から大民團への名称変更にともない、大正八年二月一日発行の『大民』第五卷第三号では、「大民團盟約」と名称を改めて掲載されるが、内容は踏襲している。なお、青年大民團の本部は、当初、東京市牛込区細工町二一番地に置かれたと伝え、大正五年六月一五日発行の『大民』創刊号の奥付にある発行所青年大民團の住所も、これと一致している。その後、機関誌発行によって発展した事業活動の必要から、本部を赤坂区表町三丁目四番地に移し、大正六年三月一〇日発行の『大民』第二卷第三号奥付と、同年四月一日発行の『大民』第二卷第四号の奥付には、発行所としてこの住所が記載されている。しかし、同年六月一日発行の『大民』一周年^(マ)紀年号の奥付には、発行所として青年大民團住所を、麻布区筭町一八二番地としており、四月から五月の間に再移転が行われたと推定される。大正六年十一月、青年大民團が「活學を講ず」の歴史的宣言（『大民』第二卷第一号誌上）を発し、国士館が開設されたのは、まさにこの地であった。

*2 士道の大本 武士の道徳を儒教の教養で秩序づけたもの。聖人の教えである人倫の道によって自己を律し、その立場から社会を指導することを使命とする武士の道徳。単に「武」や「強」のみを強調する「武士道」とは一線を画し、文武両道に立脚した真の武士道精神を指す。

*3 儀表 手本、模範。 *4 濁世淨澄 濁った世の中をきよめ、きれいにすること。

*5 野卑賤劣 下品でいやしく劣っていること。 *6 智徳の精進向上 智徳を兼ね備えた人

格の形成を学問・教育の目的とした。 *7 爵祿 爵位と俸給、地位や名誉と報酬。

三 大正六年十一月 宣言「活學を講ず」(『大民』第二卷第一号、大正六年十一月)

物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯だ科學智を重んじて徳性の涵養を知る。今日に於て教育とは唯だ科學智の賣買たるのみ、科學智の必要は本より言ふを待たざれども此の如きは唯だ物質文明に終る。精神文明なくして國家豈に一日の安きを得んや、蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり。精巧の武器萬種羅列するも、兵士起つて之を運用するに非れば、戰場に何等の効果なからん。吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たるべき眞智識を養成せん事を期す。

文化僻陋に及ぶの今日、率爾として此の如きの言を聞かば、或は吾人を以て迂となす者あらん。然れど、今日の日本文化は猿真似の文化なり、悉く之れ西洋直譯の文化なり。其の表面を模倣せるものなり、其の弊害を識別する處なくして凡て唯だ舶來品を宗と仰ぐの文化なり。

- *1 宣言「活學を講ず」 青年大民團機閱誌『大民』（大正六年一月刊）の巻頭に掲載された宣言文。後日、この宣言の趣旨に則り、「國士館設立趣旨」が作成され、國士館設立の呼びかけが行われた。
- *2 科學智 科学の知識や技術。明治維新以降西洋から流入した近代科学の知識を念頭に置いて使われている。
- *3 徳性の涵養を知る ここでは徳性の涵養の「足らざる」を知る、と補い理解すべきである。知識や技術のみを重視することから、気がつけば徳性の涵養を怠ることを戒めたものである。次に掲げる「國士館設立趣旨」では、このくだりを「徳性涵養を忘る」と改めている。
- *4 眞智識しんちしき 智識は智恵や見識を意味するだけでなく、それを備えた高僧、または指導者の人物を意味し、「善智識」などと用いる。ここでは「眞智識」と用い、「精神教育」によって「物質文明」を制御しうる見識を備えた指導者、すなわち「國士」を指す。
- *5 僻陲へきすい 辺境、田舎。
- *6 率爾そつじ にわかに、突然に。
- *7 迂う 実情にそぐわない、物ごとにとく实际的でないこと。

國家の最高學府たる帝國大學は骨抜きせる奴隸的の官吏養成所なり、藩閥の走狗を養ふの地なり、

かくして智識の寶庫は天下に公開されざるなり。可し公開さるゝの日ありとするもノート式講義は畢竟ひっきよう死學*1のみ。其説く處高遠深邃*2なるが如きも、遂ついに之れ形式範疇はんちゆうのみ、何等の信念なく誠熱なき鸚鵡の口着*3似のみ、人を化するの力なし。形式、規則、規律、試験、之れ今日の所謂教育なるものなり。青年の勉學は唯だ試験を通過せんが為めの手段のみ、自覺し自發して學を講ずるに非るなり。唯だ教はる所を其儘に受入れて、何等の疑問を起さゝる者は幸福なるのみ。彼等の教場學を授けらるゝや、拙劣なる速記者たるのみ、走れる丈け走らせらるゝ馬車馬の如きのみ。故に能く學ぶと稱せらるゝ者も亦唯だ、所謂いわゆる養勉強*4するのみ。其漸ようやく學校を終るや、一生の精力を消費し盡くして精神上のインポテントとなり、何等の思想を生み出すの能力なきなり、獨立せる人格なきなり。官僚の踏臺ふみだいとなりて氣息奄々*4たり、ノートに養はれてノートに生きる者は日本の學者なり、二十世の腐儒*5なり。

*1 死學 後続の文言にあるとおり、「唯だ試験を通過せんが為めの」勉學で、「自覺し自發して學を講ずるに非る」ため、「教はる所を其儘に受入れて、何等の疑問を起さざる」ため、「教場學を授けらるゝや、拙劣なる速記者たるのみ」で、学んだ事柄や人が生かして使われることのない学問・教育のありかたを指す。ここでは「活學」という言葉と対比して使われている。「死學」と「活學」

の違いも自ずとあきらかである。

*2 高遠深遂こうえんしんすい 学識がたいへん高く深いこと。

*3 口着似くちまね 口つきを似せること。「くちまね」と読むか。

*4 氣息奄々きそくえんえん 息もたえだえで、今にも死にそうなようす。

*5 二十世の腐儒ふじゆ 「二十世」は「現代」の意味か、「腐儒」は役に立たない学者のこと。

かくして日本國には、着似有まねつて意志無し。意志なきの一等國は、日本を以て嚆矢こうし*1となし、西人*2は日本を以て、一種特判(別カ)、他と比類なき骨董國と見なせり。骨董の一等國は日本に於て其の眞に一等なるを見る。現代の青年又多く骨董品*3たるべく養成せらる。多少の意志ある者は、親父の目より見れば危険なり。かくして人間らしき者は、凡て注意人物と見なされて社會の迫害こうむを蒙る。役人の意向を奉伺して其の言の如くに行動する者のみは、善人なり、善哉々々*4。汝諸もろもろろの善男善女、唯だ劃一かくいつと規律とを守りて、苟いやしくも新しきに目を走る勿なかれ。新らしきものは常に役人の目に付き易やすく、眞なるものは、常に危し。かくして日本の教育は徹底せる舶來品にもあらず、純なる日本品にもあらざる、毒にも益にもならぬ間に合せ物となり、單なる死物となり終れり。

* 1 嘴矢^{くちし} ものごとの初め。 * 2 西人 西洋人。 * 3 骨董品 現実の用をなさぬ品。

* 4 善哉々々 けっこうなことではないか。本当に国を思う者が退けられ、役人の意向だけを尊重して行動する者のみが迎えられる世の中を皮肉って言ったことば。

吾人茲^{ここ}に於てか卓落不羈^{*1}、高く形式の外に超脱して、活學を講ずるの道場^{*2}を開設せんと欲す。法三章^{*3}、唯だ眞に師たり弟たるの情誼^{*4}に依つて之を維推^{*5}せん事を期す。來る者は拒まず、去る者は追はず、天空海濶^{*6}、嘗て他の拘束を受けず、唯だ自ら守るの禮と節とを尚^{たつと}ぶのみ。

かくして此の道場は、大自在力を孕むの契機たるを期す。陋隙^{*8}僅かに膝を交ふるの一小寺^(千七)小屋たりと雖^{いと}も、以て大正維新の大業を成就するの松蔭塾に私淑^{*10}せんとす。一心足つて萬能始めて用ふべし、我が道場の期する處は心學^{*12}なり、活學^{*13}なり、信念の交感^{*14}なり。理を説いて理に墮^だせず、術を語つて術に溺^{おぼ}れず、舌頭^{ぜつとう}能く萬有を吐吞^{とどん}して、方丈裡に風雲を捲かんとするに在り。

* 1 卓落不羈^{たくらくくみ} 抜きんでて優れ、制度に縛られることのないこと。

* 2 活學を講ずるの道場 「活學」は明治中期の新聞論説に使用例が散見する。知識を機械的に切

り売りすることではなく、学んだ事柄や人が、真に世の中のため生かされるような学問・教育のありかた、を指す。「講ず」とは、文字通り、師弟・友人が集まり学問や物事の道理について議論し合い研究すること、すなわち「講学」を意味する。そうした学問・教育を行う教場を創る理想を述べたもの。

* 3 法三章 僅かに三か条しかない法。漢の高祖が、前代の複雑な法を、殺人・傷害・盗みの三つを罰する簡略な法に改めた故事による。ここでは、真の学問の場には、形式ばかりで複雑な法規則はいらぬことを述べている。 * 4 情誼 信頼によって結ばれた親しい間柄。

* 5 維推 これをおし進める、おしひらくの意味。「国士館設立趣旨」では、「之を維持せん」と改めている。 * 6 天空海濶 天と海が広々としているごとく度量が広くさっぱりしていること。

* 7 自在力 思いのままに發揮できる力。 * 8 陋隙 狭苦しい場所。「国士館設立趣旨」では、「陋隘」と改められている。

* 9 膝を交ふる 師弟がその中に入れば、膝がくつつくほどに狭いことを言う。「国士館設立趣旨」では、「膝を容るゝ」と改められている。

* 10 松蔭塾に私淑せん 青年大民團は「大正維新」を標榜し、社会の啓蒙・改良を目指したことから、明治維新に貢献した人物を多く輩出した松下村塾を範としようとした。

* 11 一心足って萬能始めて用ふべし 知識・技能・道具など何事も、それを活かして使おうとする

精神があつて初めて活用される、心がなければ死物化する。

* 12 心學しんがく 「心学」という言葉は、江戸時代初めから朱子学や陽明学で「心の修養の学」というような一般的な意味で用いられていたが、江戸中期以降は、石田梅岩の創始した庶民教育思想（石門心学）の呼称として用いられることが多い。ここでは、西欧の経験科学的知識や儒学のうち朱子学にみられる分析的な理学に対し、個人の主体性や実践を重視しようとする知行合一論的な立場で心を修養することとして用いられている。

* 13 活學かつがく 『大民』の「宣言」及び「國士館設立趣旨」で教育の根本精神として用いられた用語であり、古典に典拠を有しない言葉であるが、日本の近代教育史上、画期的な意義を内包する言葉である。その意味するところは、西欧から直輸入した物質文明とその知識・技術を鵜呑みにし、機械的に詰め込む学問・教育ではなく、それを用いる人の役割に視点を置く精神教育を重視することで、物質文明優先の文化的退廃を克服しようとする教育思想に立脚している。また、幕末の洋学思想や明治の欧化政策の影響で、実利を重視する実用の学が尊ばれる傾向に対し、東洋の精神文明と西洋の物質文明の統合、科学智の習得と知行合一による実践の重視を含意する。

* 14 信念の交感なり 「活學」の道場、すなわち真の学問・教育の場は、知識の機械的受け売りの場であつてはならず、師弟が互いにその信ずるところを議論し研究し合い信頼の絆で結ばれたとこ

ろであるべきだ、との理想。

*15 方丈裡りに風雲を捲まかん 「方丈」は師の住まいする、小さな教場を指す。新しく設ける教場から、新しい学問・教育の嵐、息吹を捲き起こそうとする意気込みを述べたもの。

四 大正六年十一月 国士館設立趣旨

国士館設立趣旨^{*1}

物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯だ科學智を重んじて、徳性涵養を忘る。今日に於て教育とは唯だ科學智の賣買たるのみ、科學智の必要なるは本より言ふを待たざれど、此の如きは唯だ物質文明に終る。精神文明なくして國家あ豈あに一日の安きを得んや。蓋けだし精神文明は物質文明を統一指導するものなり。精巧の武器、萬種ばんしゆ羅列られつするとも、兵士起つて之を運用するに非るよりは、戰場に何等の効果なからん。吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たる眞智識を養成せ

ん事を期す。

一國の最高學府はまた天下に公開されざるなり。若し公開さるゝとするも、ノート式の講果はひつきょう畢竟死學のみ。其説く處高遠深遂しんすいなるが如きも、遂に之れ形式範疇はんちゆうのみ。何等の熱情なく、信念なし。人を化するの力なし。形式、規則、規律、試験、之れ今日の所謂教育いわゆるなるものなり。

*1 國士館設立趣旨 一九一七（大正六）年一月四日の國士館発会式を期して発せられた告知文である。内容は、同年一月の『大民』巻頭に掲げられた「宣言」の内容に、若干の省略と修正の手が加えられている。

*2 精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たる眞智識を養成せん事を期す 「精神文明と精神教育とを此際に唱道」は、西洋輸入の「物質文明」偏重の傾向に対して、東洋の「精神文明」の役割を重視する立場から「精神教育」に力を注ぐことで、将来の日本の柱とも礎ともなるべき指導者を育成することこそ國士館設立の目標であるとして、國士館教育の理想を端的に表明した章句である。「智識」とは、世を正しく導く指導者、すなわち國士を意味すると解釈するべきである。

吾人茲(こゝ)に於てか卓落(たくらく)不羈(ふき)高く形式の外に立つの士*1に依り、膝を交へて親しく活學を講ずるの道場*2を開設せんと欲す。法三章、唯だ眞に師たり弟たるの情誼に依つて之を維持せんを期す。來る者は拒まず去る者は追はず、天空海濶(てんくうかいかつ)他の規束なく、唯だ自ら守るの禮*3と節*3とを尚ぶのみ。

而して此の道場は大自在力を孕(はら)むの契機たるを期す。陋隘(ろうあい)僅かに膝を容るるの一小寺(千セ)小屋たりと雖も、大正維新の松蔭塾たるの効果あらん。一心足つて萬能始めて用ゆべし。*4我が道場の期する處は、心學なり、活學なり、信念の交感なり。理を説いて理に墮せず、術を語つて術に溺れず。舌頭萬有を吐吞(とどん)して方丈裏に風雲を捲かんとするに在り。

*1 卓落不羈高く形式の外に立つの士 「士」は人物。「卓落不羈」は他に抜きんでて優れ、規則や制度に束縛されていないことをいう。「高く形式の外に立つ」の文言とともに、既存の他のいかなる組織や制度にも縛られず独自の見地を堅持できる人物。設立される國士館に集う賢人たちが、そうした人物であることをいう。

*2 活學を講ずる 機械的な知識の受け売りは「死學」で、人を教化する力なしとし、学んだ知識・技能を眞に活かす実践力を有する人を育てる学問・教育のありかたとして「活學」を提唱している。「活學」は、漢籍の古典に典拠のない語であるが、幕末から明治にかけて西洋から流入した実利・実

用の学から生じた知識偏重を戒め、知識・技能を真に使いこなす側にある人間の主体性に視点をあてた独創的な学問教育論である。明治中期の新聞論説に使用例が散見する。

*3 唯だ自ら守るの禮と節 新たに設立される教育機関は、おおらかで、複雑な規則は用いず、そこで学ばんとする者が自らを律し正す「禮節」によるのみとする学風について説いたもの。

*4 一心足って萬能始めて用ゆべし 諸々の知識や技能も、それを用いる者の意思や心のありかた、すなわち精神のはたらきによって、はじめて活かされ、効果を發揮するということ。

一、場所 麻布區筭町一八二番地 青年大民團本部

二、時間 午後七時より九時まで（日曜祭日休み）一日二時間

一、費用 一ヶ月一圓（其他一切不要）

先生 原口 竹次郎^{*1}

山崎 源二郎^{*2}

中野 正剛^{*3}

伊藤 重次郎^{*4}

課目

米國研究、涵養、世界時事、東洋古學、殖民、
財政、哲學、軍政、經濟、美學、
基礎法制、社會學、歷史、東邦學、

發會式

永井	頭山	柴田	寺尾	江木	田尻	宮島	三宅	阿部
柳太郎 ^{*12}	満 ^{*11}	徳次郎	亨 ^{*10}	衷 ^{*9}	稻次郎 ^{*8}	大八 ^{*7}	雄次郎 ^{*6}	秀助 ^{*5}

一、会場 青年大民團本部（麻布笄町一八二 電話芝四六九）

一、期日 十一月四日（早朝より相撲、午後一時會式）

一、先輩の講話

臨場先輩（確定）

田尻稻次郎、三浦 梧樓^{*13}、頭山 満、江木 衷、犬養 毅^{*14}

宮崎^(他) 大八、三宅雄次郎、寺尾 亨、添田 壽一^{*15}、原口竹二郎、

山崎源二郎、阿部 秀助、伊藤重次郎、長島 隆二、中野 正剛、

野田^(卯)□太郎、神武品太郎、結城虎五郎、（其他）

十一月一日より事務開始す（十一月五日より始講）

青年大民團本部

麻布笄町一八二番地

電話 芝四六九番

*1 原口竹次郎 早稲田大学教授、南方調査の先駆者。

*2 山崎源二郎 東京帝大教授、財政

経済学。 * 3 中野正剛 明治一九年福岡県生まれ。東京朝日新聞記者を経て『東方時論』社主。

代議士。浜口内閣の通信政務次官。 * 4 伊藤重次郎 山下合名会社調査部嘱託。海運論。

* 5 阿部秀助 明治九年福岡県生まれ。東京帝大卒。慶應義塾大学理財学科教授。

* 6 三宅雄次郎 雪嶺。万延元年金沢生まれ。東京帝大卒。同大准教授を経て文部省編輯局員。雑誌

『日本人』『日本』『日本及び日本人』を中心に活躍したジャーナリスト・哲学者・歴史家。

* 7 宮島大八 詠士。書家。慶応三年生まれ。米沢藩出身。東京商学校中退、清国留学、張廉卿に師事。帰国後、東京帝大講師、東京外国語学校講師歴任、善隣書院を開き日華親善に尽力。

* 8 田尻稲次郎 嘉永三年生まれ。薩摩藩出身。米国留学、エール大学で財政経済を学び帰国。大

蔵省入省。会計検査院長、貴族院議員。大正七年から九年まで東京市長。

* 9 江木衷（まこと） 安政五年生まれ。岩国藩出身。東京帝大卒。法学。弁護士。内務大臣秘書官、参事官。 * 10 寺尾亨 安政五年生まれ。福岡藩出身。パリに留学、国際法を学ぶ。帰国

し東京帝大法科大学教授。外務省参事。辛亥革命勃発により革命政権顧問就任。

* 11 頭山満 安政二年生まれ。黒田藩出身。国会開設運動を経て玄洋社設立、炭坑経営者。国権主義・アジア主義運動家。 * 12 永井柳太郎 明治一四年金沢生まれ。早稲田大学卒。英国留学

帰国後、早大教授。社会政策・植民政策。大正六年九月早大騒動で早大を追われる。同九年代議士。

拓務相・逓信相・鉄道相、大日本育英会初代会長歴任。 * 13 三浦梧樓 弘化三年、菽生まれ。

戊辰戦争参加。陸軍少将、東京鎮台司令官を経て、学習院長、貴族院議員。朝鮮国駐在特命全権公使。枢密顧問官。 * 14 犬養毅 安政二年生まれ。岡山藩出身。慶応義塾に学び、『東海経済新

報』『交詢雑誌』『郵便報知新聞』発刊に参画。立憲改進黨を結成。進歩党、憲政党、憲政本党、立憲国民党、大正政変後、第一次護憲運動。立憲同志会、国民党総理。 * 15 添田壽一 元治元

年筑前生まれ。東京帝大卒。大蔵省入省。大蔵次官を経て台湾銀行初代頭取。日本興業銀行初代総裁。

五 大正八年一〇月 国士館の本義（『大民』第五卷第一号、国士館新築記念号、大正八年

一〇月）

第四章 国士館の本義^{*1}

(一) 國家の大本は文教に在り^{*2}

以上述べ来れる處、當我國の弊害の一端に過ぎぬ。而かも此の如きは我等をして到底坐視するに堪へざらしむる處である。我等は此の如き弊害を除き、日本國民をして何等拘束なき、眞の自由の立場から新たに直出して、其の實力を十分に發揮せしめ、依て以て國運を開拓せしめん事を期する。之が為めには我々は種々の手段を講じ、幾多の事業を開始する。已^{すで}に今日迄我等は雑誌「大民」に依つて、我等の意の在る處を宣傳し來つた。又大民團本邦^(部カ)内に國士館を開校して青年の教育に従事し來つた事は已^{すで}に述べた通りである。今や時運會して、國士館新築成り、世田ヶ谷松陰祠畔^{しはん*3}に移る事となつたのである。

吾人は國家改善の根柢を文教^{*4}に置く、殊^{こと}に戦後經營の要諦^{ようてい*5}を文教に在りと見る。眞に日本人の目を開き、日本人をして其地位と任務とを自覺せしめ、依て其の進むべき道を知らしむる事は文教に頼る外はない。知るは行ふの始めである、從來盲目になり勝ちな日本人を教へて眞の知見を開かしまる事は之れ日本の急務である。

*1 國士館の本義 大正六年開設された私塾國士館は、早速文教活動を開始するとともに、教育機

関としての組織と教場の整備に努めた。大正七年には国士館の財団法人化と教場拡充のための移転が企画された。翌八年には世田谷の現在地に用地を確保、講堂を建設して移転する計画があきらかにされた。講堂は四月に着工、七月に上棟式、一〇月には財団法人設立の申請を行った。本書は世田谷講堂の落成を間近に、財団法人の設立申請手続き中に、青年大民團機関誌に掲載されたものである。筆者は不詳。

*2 國家の大本は文教に在り 国家建設の大道は学問と教育にある、との考え。国士館創業者たちの国家観、教育観がもつとも端的に表現された一句である。

*3 祠畔しはん 「畔」はものほとり、かたわらをいう。ここでは松陰神社の近傍を意味する。

*4 文教に置く 「文教」は学問と教育により人と社会を教化すること。社会改良を目的とする青年大民團の運動が、当時、文教による社会啓蒙活動に重点を置いていたことは、本節表題や後続の文章と合わせみて明らかである。

*5 戦後経営の要諦 「要諦」は物事において肝心な事柄。第一次世界大戦は、一九一八（大正七）年一月に休戦が成立し、翌年六月、ヴェルサイユ講和条約が結ばれた。ここでは大戦後に生じた内外の諸課題への対応策として最も重要な事柄の意味。

然るに何事ぞ、日本は文の國に非ずして武の國であると論定され、文部大臣は常に伴食大臣として殆んだ存在を認められなかった。今や獨逸は屈辱講和を余儀なくせられて世界に於ける武國主義は影を潜め、今後の列強は文國として文明の經濟戦に入る事となった。日本獨り幾十師團と八々艦隊のみを以て世界に覇を稱へんとするは愚かしい事である。同時に人民を愚にし官僚権を私するは亡國政治なる事、露國之を證明して居る。世界の日本は大いに文教の興隆を計らなくてはならぬ。兵勇と武器とは末である。先づ眞の人間を作る事である。閩族官僚の手足たる人民を作る勿れ。唯だ眞に人たるの人民を養成せよ。日本の戦後經營に缺くべからざる事は人を作る事である。

*1 日本は文の國に非ずして武の國であると論定され ヴェルサイユ条約によって日本は旧ドイツの權益を継承し、山東半島や南洋諸島における權益を拡大した。このため米中を初めとする連合国の間から、これを非難する動きが表れていた。 *2 伴食大臣 「伴食」は主客のお伴をして馳走にあずかること。職にふさわしい実権・実力が伴わない、名前だけの大臣。

*3 屈辱講和 ヴェルサイユ条約は、戦勝国側が、敗戦国のドイツに巨額の賠償金を課し、軍備を制限し、本国領土の一部を割譲させるきびしいものとなった。 *4 今後の列強は文國として

講和条約締結後、戦勝国が中心となって、国際紛争を平和的に解決するための、国際協力機関を設立しようとする機運が盛り上がり、一九二〇（大正九）年に国際連盟が設立された。

*5 露國之を証明 帝国ロシアでは、一九一七（大正六）年に革命政権が成立していた。

*6 世界の日本は大いに文教の興隆を 世界が国際協調に向かうなかで、日本の向かう方向は、軍備の拡張よりも文教の興隆が優先される、との主張。

なう 名けて教育といふ。立派な名稱であるが、今日の我が教育制度と教育機関と自稱教育者とは、すべて生命なき死物である。由来日本の文教は人民を権者の道具となさんが為めの機関であった。眞理を教へ自由研究を許して、以て眞人を作る事を為さずして、唯だ覇者の権力維持に都合好き理窟を青年子弟の頭脳に詰め込んだのである。故に日本には一人の世界的思想家哲學者がない。偶また藝術家の如きものあれど、彼等は眞の文學者に非ずして器用な藝人である。近松、馬琴、西鶴、芭蕉、光淋（毒）、廣重の徒と、皆な一藝人である。彼等は覇者はしやの方便主義政策下に安住して嘗て天地の大經たいけいに觸れず、又人間の眞価値を考へなかつた。而して一方に山鹿素行、大鹽平八郎、佐倉宗吾（*2）の徒、皆な反逆者として忌避きひされた。偶ま明治維新の改革者なる者が現はれたけれども、之れ自發的に人間の

眞髓しんすいを捉とらへたものでなくして、黒船の襲来に驚いて長夜の眠ねむりを醒さまされたる徒のみ。日本の文化は明治維新の政治的革命に依つて、何等の変化を受けなかつた。唯だ徳川幕府に代へて薩長幕府が新形式の上に築きずかれたのである。其精神に於ては依然、島國的日本である。覇者の日本である。人民を愚にするの政治である。而して民間政黨の最終目的も亦薩長幕府より時々政權を自黨に借用せん事であつた。即ち日本の文化は明治の革命に依つて何等の變化を受けなかつたのである。

*1 天地の大經 「天地」は、この世界、世の中。「大經」は、人の踏むべき大道、常道。すなわち

人倫の道。 *2 山鹿素行、大鹽平八郎、佐倉宗吾の徒 日本の近世史上において自らの志

操に忠実に義挙の行動に出て權力により罰せられた人々。 *3 唯だ徳川幕府に代へて薩長

幕府が新形式の上に築かれた 薩長藩閥政權に反対する勢力の間にみられた明治維新観。

日本の記録には名僧智識なる者の名が残つて居るけれども、之れ世捨人である。利己主義なる隱遁者いんとんしゃである。彼等は八萬何千卷といふ馬鹿げた浩瀚*1なる經文の中に窒息して生きながらの木乃伊みいとなつたのである。然しかればお寺の本堂には死氣漂ただようて居る。豈あに衆生濟度*2あらんや。日本の文明

は斯の如き僧侶の囀語（まねごと）に累（かさね）せられて生々の氣を失った。夫れ教育者は大哲學者宗教家でなくてはならぬ。眞を見て言はず義を見て成さず、俗人に媚（こ）び權者に阿（おも）ね、其地位をのみ顧慮（こりよ）するが如きは教育の本旨に遠い。教育者は殉道者（じゆんどうしや）の覺悟を要する。今や官學の校長は一行政官の如く、私學の校長は奉加帳廻りに浮身（うきみ）を襲（ゆづ）して其の校舎の美と設備の華を競ひ、以て唯だ生徒の數を増さん事に腐心する。教育者とても大なる常識を要する事勿論なるも、俗智と俗才とは教育者に大害あり。唯だ直情徑行（ちやくけいこう）、其の理想に向つて驀進（まうしん）する者にして始めて教育者たるを得る。學校は科學智の小賣所にして、校長は市場の親方の如きは今日の現状である。

*1 浩瀚（こうかん） 書籍の大部で量の多いこと。

*2 衆生濟度（しゆじよさいど） 仏教語で仏や觀音が、衆生（生き

とし生きるもの）を迷いの海から救い出し彼岸にわた（度）すこと。人々を救つて悟りを得させること。

*3 囀語（まねごと） ねごと、たわごと。

*4 直情徑行（ちやくじよけいこう） 他人の迷惑や周囲の事情

を考えずに、思うことを実行にうつすこと。

「神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり」之れ吾人が、三十年前の國民教育第一期に諳誦を強ひ

られた日本道德の金科玉条きんかぎよくじよう*1である。然れども嗚呼ああ、此神は何處に在りや、此人は何處にありや。今日の人民は権者富者の奴隷にして八百萬の神社は宗教に非るなり。故に眞の人間を作らんが為めには、國家を改善しなくてはならぬ。人民を萬物の靈たらしめんが為めの教育を施さなくてはならぬ。祖先崇拜の精神を曲解して排他主義に陥る時は、世界の除け者にせらるゝ危険がある。現に乃木神社を宗教の神と見て佛耶教ふつてう*2を一掃して日本を固有の神の國に還元せしめん事に腐心する頑迷老年あり。青年團を起して以て青年思想を劃一かくいつにせん事を圖るあり。御用教育所たる大學内に視學官と國民教育を司る校長とを集めて舊式の尚武主義を強要するあり。此に於て國民教育の任に當る校長なる者は、端役人の如く鞠躬きくう*3如たる舶来瘦犬式のフロック姿となる。彼には人を教化するの風丰ふうほうなく、他に感激を與ふるの生気なく、権者の命之れ従ふの耄ぼけたる人形である。

*1 金科玉条 非常に大切な法令。転じて主義・主張をまもるべき信条を指す。

*2 佛耶教 仏教とキリスト教。ここではともに外来の宗教として排外主義者の攻撃の対象にされることを言う。

*3 鞠躬きくう如じよ 身をかがめて、うやまいつつしむ様子。

吉良上野介式の視學官に死命を制せらるゝ制度下にある校長は、到底児童の教育に専念する事が出来ない。斯くして校長は其地位を失はざらんが為めに、校内の設備と形式を整へて権者の目を眩まし、生徒を人質に捉へて餘計なる設備の費用寄付を父兄に強要する。各教師亦校長の鼻息を窺ひ、其の電車車掌にも劣る報酬より打算して被備者根性となり、出来る丈け骨惜みをする。嗚呼此の如くして次代の國民を作るべき義務教育の場は、市井の遊藝教授所にも劣るものとなる。何の師弟の情誼あらんや。何の學業獎勵あらんや。唯だ有るものは形式的試験と、細々しい道具立てのみ。經濟思想を養成すと稱して児童貯金を獎勵するも、今日の如く贅澤な道具立てを以てしては、児童に濫費を教ふるに等し。嗚呼次代の國民は禍なるかな。今日の壯麗なる學校は、質に於て寺子屋にも劣る。斯の如き状態を以てして萬物の靈長たるべき人間を作り得るか。抑も亦天地の主宰たる神を奉ずるの眞人間を作り得べきか。吾人が大民團組織の當初より麻布 筭 町の陋屋に國士館學校を開いた所以は主として茲に在る。今や國士館新築成り更始大躍進の時機に會した。我等は我等の事業の一つとして先づ眞の教育の場所を設くるのである。而して活學を講じて活人を作るのである。然らば吾人の活學と名くるものゝ意義如何？

*1 更始 古いものを改め、新しく始めること。

*2 活學を講じて活人を作る 國士館の教

育のねらいを端的に述べたものである。「活學」は学んだ知識や技能を活かすことができる実践的力を有する人間を育成する学問・教育のありかたを指しており、産業と直接結びつく実用の学という意味ではない。

(二) 是れ活學の大道場

今や文明の趨勢すうせいが主として物質上に傾き、成金主義横行の世となつた。従て人は唯だ科學智を重んじて徳性の涵養かんようを忘却*1した。今日に於て學問教育とは科學智の売買たるに過ぎざる事となつた。勿論科學智の必要なるは言ふに俟たざる事ながら、今日の趨勢すうせいに放任する時は物質の文明に止まり、精神文明は退歩する。精神文明なくしては國家が保てない。精神文明は物質文明を統一指導して其用を為さしむる動力である。精巧な武器が萬種羅列するも兵士起つて之を運用するに非あらざるよりは戰場に何の効果も奏し得ない。故に吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たるべき「眞智識者しんちしきしや」を養成せん事を期*3するのである。明智を開いて知行合一する所に活學の意義が存する。*4文化僻陲*5に及んで居る今日、卒然そつぜん此の如き言を聞かば或は吾人を以て迂うとなす者もあらう。併しかし今日の日本文明は猿真似ざるまねであつて西洋直譯の文明、而かも其の外觀を模倣せるに止まる。其の眞価を究めず、其の弊害を識しらずして唯舶來品はくわいひんを難有がると同じ程度の文明である。

*1 人は唯だ科學智を重んじて徳性の涵養を忘却した 前掲「宣言」「國士館設立趣旨」以来、國士館設立に際し再三繰り返される基本的モチーフである。

*2 精神文明は物質文明を統一指導して其用を為さしむる動力である 「精神文明」と「物質文明」の対比のうえで、「精神文明」の優位性を主張する思想の背景には、佐久間象山の「東洋の道德、西洋の芸術（科学技術を意味する）」以来の「和魂洋才」思想に加え、「今日の日本文明は猿真似であつて西洋直譯の文明、而かも其の外観を模倣せるに止まる」とする、西洋文化直輸入の社会への批判が込められている。また、「西洋文明Ⅱ物質文明」と「東洋文明Ⅱ精神文明」を対峙させる思考方法には、欧州列強のアジア進出が激化した明治中期以降、岡倉天心の思想にみられるアジア主義的文明観の片鱗が垣間見える。士道の大本にもとづき心身の修練に努め、智徳の精進向上を目指すとする國士館教育の精神の土壤には、そうした伝統が底流となっている。

*3 國家の柱石たるべき「眞智識者」を養成せん事を期する ここで言う「智識」は、世の中を正しく導く指導者を意味し、「眞智識者」とは「善知識」と同様の使い方である。従つて、ここでは設立する國士館において、國家を担うに充分な力を備えた指導者を養成することを期する、の意味になる。

*4 明智を開いて知行合一する所に活學の意義が存する 新しい知識を充分に積極

的に修得した上で、それを死蔵することなく実践に活かすこと、すなわち活學の含意するところを端的に示した一章である。 *5 僻陲^{へきすい} 辺境、田舎。

見よ今日我が最高の學府は奴隸的官吏養成所である。走狗^{*1}飼育所である。権者に都合悪しき點は講義する事を許さない。故に眞の知識は開放されない。其のノート式講義は、遂に死學たるに終る。其説く所高遠深奥なるが如きも、之れ曲學^{*2}阿世の形式教育のみ。何等の信念なく熱誠なく、人を化する力がない。設備と規則と試験と之れ其の教育なるものである。學生の勉學は唯だ試験を通過せんが為め的手段たるに過ぎない。自覺し自發して學を講ずるに非ず。唯だ無批判に知識の断片を詰込まれるのである。其の教室に在るや拙劣なる速記者たるのみ。唯だ馬車の如く精を涸^こらして試験なる目標に向つて走る。然れば其の漸^{ようや}く校を卒業した時には精力殆^{ほと}んど盡き、精神上のインポートとなり、何等新たなものを産み出す能力がない。自由意志なく獨立の人格なく、官僚の手足となりて迎合之れ事とし、唯だ他の用をなすべき機械たるに終る。最高學府^{すて}已^{しか}に然り。其の下に在る教育機關も凡^{すべ}て之に準じて死學を詰め込むに過ぎない。斯^かくして出来上るは拜金主義の技師と、阿世の腐儒^{*3}である。

* 1 走狗そうく 狩猟に使われる狗（いぬ）。転じて、他人の手先となって使役される人を意味する。官学

が権力の手先となって働く人間ばかりを養成している、とする批判。

* 2 曲學きまがく阿世あせい 学問を曲げてまで権力や世俗におもねること。

ねるだけで役に立たない学者。

* 3 阿世あせいの腐儒ふじゆ 世におも

然しかれば日本には眞ま似ねがあつて獨自の意志がない。獨自の意志なき一等國は日本を嚆こう矢とする。

西人せいじん*₁は日本を以て一種特別の比類なき骨董國*₂と見なして居る。骨董の一等國は日本に於て其の眞に一等なるを見る。今日の日本に何等の感激なく賞讃なく興國の氣象なきは凡て此の如き死學の餘弊である。

吾人深く茲こゝに鑑かんみる處あり。國士館を開いて卓たく落らく不ふ羈き高く形式の外に超越する活學を講ずる。其主義精神*₃とする處は、自由獨立、各人をして其天賦の能力を存分開發せしむるに在る。人各特長あり。其欲する處に善導して之を大成せしむるが吾人の教育方針*₄である。國士館は決して或る一種の限られた人間の養成所ではない。其講學*₅の方法としては自修自發を旨とする。教師の口述を筆記する如

き迂愚^{*6}に倣^{なら}はず。又妄^{みだ}りに不要の諳記を強要せず。詰込みにあらずして誘導^{*7}にある。教師は命令者
 にあらずして相談相手である。同時に館生は自分の労力に依つて自活^{*8}を期する。即ち學校附属三千
 坪の畑を耕すと共に、別に或種の室内工業を営み、之に依て各自の生活費を辨するのである。要す
 るに我國士館の主義方針^{*9}は、自由、自修、自活の三條に帰する。而して校紀^{こうき}の點^{てん}に至つては何等
 煩瑣^{はんさ}なる規程を設けずとも、唯だ眞に師たり弟たるの情誼に依つて之を維持せん事を期する。来る
 者は拒まず、去る者は追はず。天空海闊唯だ自ら守るの禮節を尚ぶ。斯くして我が國士館は大自在
 力を孕むの機關たるを期する。正に之れ大正維新の大業を成就すべき第二の松陰塾である。我が國
 士館の期する處は吉田松陰の如き実践躬行^{*10}以て他を率ゐ、天下の患に先立つて患ふるの眞骨^{*11}頭^(頂カ)あ
 る人間を作る事である。一心足つて萬能始めて用ゆべし。吾人の論ずる所は、心學である、活學で
 ある、信念の交感である。理を説いて理に墮せず、術を語つて術に溺れず、舌頭^{ぜつとう}能く萬有^{とどん}を吐吞して、
 方寸^{ほうすん}裡に風雲を捲かんとするにある。

* 1 西人 西洋人。 * 2 骨董國 もはや生き生きとした活力を失っている国。

* 3 其主義精神 ここでは「活學を講ずる」ところの「主義精神」の意味で用いられているが、そ
 れを、「自由獨立」「各人をして其天賦の能力を存分に開發せしむるに在る」と説明している。

* 4 教育方針 国士館を開設する教育方針を、「人各特長あり。其欲する處に善導して之を大成せしむる」にありと、人間教育の普遍性に立脚して説明している。 * 5 講學の方法 「講學の方法」とは、学問教育の方法であり、それについても「自修自發を旨とする」と、普遍的な学習の基本に立脚して説明している。

* 6 迂愚 世間の事情に疎く、愚かなこと。

* 7 誘導にある 機械的な詰め込みを退け、人間の能力・才能を引き出すことに教育の本旨があるとする普遍的原理を示している。 * 8 自活を期する 国士館に学ぶものは、自分で働きな

がら自活することを勧めている。後に柴田徳次郎館長は、学生が学習目標とすべき「誠意」「勤労」「見識」「気魄」の四徳目を掲げたが、その一つに「勤労」が加えられていることに注目したい。

* 9 国士館の主義方針 国士館が学生に期待するところの「主義方針」は、「自由」「自修」「自活」の三條に帰する、と総括している。前に活學を講ずる「主義方針」を「自由独立」とし、「講學の方法」を「自發自修を旨とする」とし、国士館生は「自己の労力によって自活する」と述べたことを総合要約したものである。 * 10 実践躬行 自らの意思で実際に行動すること。

* 11 天下の患に先立つて患ふる 世の中に災いが発生する前にそれを憂え心配すること。

同時に吾人は毫末智術*1を疎おろそかにするものではない。必要なる新智識は之を尊重して一層の闡明せんめいに進まん事を期する。新智識と精神修養とは両々相俟まつて用を為す*2。一方に偏するは深く戒むべき事である。其の精神修養のみを主張して邪路に陥り、「宇宙萬事唯だ一心の發露のみ、一心凝こつて成る處、萬種の差別見求めずして心胸に豁かつげん然たるものあらん*4。何を苦んで千種煩はしきの智術を逐一習得するの要あらん」と、なすが如きは禪家の詭辯を誤り信じて自らを愚にするものである。妖僧の催眠術と禪家の眞智識とは異なる。

今夫れ支那の經書を讀む者は誤つて腐儒となり、西洋百科の學を講ずる者は灰殻となる。腐儒と灰殻とは共に偏局せる者の陥る弊害である。儒書を學ぶ者は、精神修養に没頭して新智識の開發を粗にし、遂に頑愚にして當世の事務を知らざる木偶*5と化す。之に反して西洋百科の學を修むるものは、其の新智術に眩惑せられて自己精神の所依*6を忘れ、翻々たる輕薄術學の徒*7となり。所謂吹けば飛ぶ如き灰殻と化し、折角其の修得せる新智識も之を世道に資する處なきに終らしむる。二者共に新人天下を經營するの道に非ず。吾人が國家人類の趨勢を達觀して世と時とに適應するの活學を講ずる所以*8のもの、深く茲に鑑る處あるに基く。而して我國士館は吾人の擅有物せんゆうぶつにあらず。財團法人となして之を天下に公開し、以て七千萬國民と共に此の大業を成就せん事を期するものである。

*1 毫末智術こうまつちじゆつ

「智術」は科学的知識と技術を指す。前にその直訳輸入や機械的受け容れを批判した西洋の科学知識を指している。ここでは西洋の科学知識そのものの受容を軽視するものではないことを述べている。むしろ新しい知識は積極的に摂取し、さらにその内容を深め明らかにする努力をすべきことが主張されている。

*2 新智識と精神修養とは両々相俟まつて用を為す 國士館の教育は新しい知識や技能を少しも軽視するものではなく、知識の修得と精神の教育とが統一されはじめたその効果が發揮されることを述べている。

*3 一方に偏する 新しい知識や技術を学ぶことを軽視し、精神的修養のみを重んじ、それに偏ること、すなわち、いわゆる精神主義に陥る危険性を戒めている。

*4 豁然かうぜんたるものあらん 迷いや疑いを打ち払うことができようか、できないだろう、の意。

*5 木偶こく 木ぼりの人形。転じて物の役に立たない人間。

*6 所依 よりどころ。たよりにするところ。

*7 術學じゆがくの徒 学問のあることをひけらかし、自慢する人物。

*8 活學を講ずる所以 西洋の科学的知識技術の修得のみに偏り、精神の修養を怠ること、精神の修養のみに偏し、新しい科学知識の修得を怠ること、こうした双方への偏りを防ぐことで、活きた学問を、学んだことを実践に活かすことのできる人物、すなわち「活人」を作ること、これが「活學を講ずる所以」である。

六 大正八年一月 国士館の主旨及び本領（『大民』第五卷第三号、大正八年二月）

国士館の主旨及本領

（国士館開館式^{*1}に於ける演説要領）

長瀬鳳輔

国士館の主旨及本領に就きましては事實上の創立者たる柴田徳次郎君が當然述べられる筈であります。同君は唯今式辭^{しきじ}を述べられましたので、僭越^{せんごつ}ながら不肖^{ふしょう}なる私が同人中の年長者と云ふ所から簡単に申上げる事に成りました次第であります。

さて此の主旨本領に就きましては規則書や又雑誌「大民」を御覧下さいますれば御諒解^{ごりょうかい}が出来る事と存じますが、その主旨は極めて簡單明瞭で、即ち国士たるべき人材を養成^{*2}しやうと云うのであります。又その本領に至りましては別に詳しく申し上げる迄もなく、第一此の講堂の建築が殿堂風でもあれば又寺院風でもありますが要するに純日本式であります所を御注目下されば自然御

合點が行くかと存じます。それに又校舎の位置をば特に松蔭神社の側に選みました點から致しましても、大概御諒解が出来られる事と存じますが、吾々は此の國士館をば大正の松陰塾たらしめたいと云ふ理想^{※3}を有して居るのであります。

***1 國士館開館式** 麻布笄町を拠点に活動を開始した國士館は、大正七年教育環境を改善し、組織の財団法人化を図るための準備を開始した。曲折を経て世田谷の松陰神社畔の現在地に用地を確保、講堂を建設し移転する計画となった。講堂建設は大正八年四月に始まり、同時に進められた法人化も、一〇月に申請を行い、十一月はじめに講堂の落成と財団法人の認可を受ける運びとなった。一月九日には落成式を兼ねて財団法人國士館の開館式が挙行された。これはその式典における長瀬鳳輔の挨拶である。長瀬は、法人化して最初に設置された國士館高等部の初代学長である。

***2 國士たるべき人材を養成** 國士館の主旨本領をもっとも端的に明言している。

***3 大正の松陰塾たらしめたいと云ふ理想** 國士館の母体をなした青年大民團は「大正維新」を標榜し、文教活動を基軸とする社会啓蒙運動を展開していたが、明治維新に貢献した人物を多数輩出した松下村塾の掣みに倣うことを目標とした。

そこで此の國士と云ふ言葉の意味に就まして少しく私一個の見解を述べたいと存じますが、御承知の如く此の國士の士と云ふ文字は昔は『さむらい』即ち武士の事に用ひましたのでありますが、今日では斯かる特別な階級は無いのでありますから、そのやうな意味では無論ないのであります。そこで士とは即ち男子と云ふ意味で、英國の所謂マンと同意義であります。私は之をば『人格者』即ち英語のマン・オブ・キャラクター(トカ)を解したのであります。所で單に『人格者』と申しまするとその意義が聊いささかか漠然たる嫌きらいがありますが、兎とに角かく「人格者」だとか或は「人材」は今日我が國に於きまして決して尠すくないとは言へないと存じますが、眞に我が日本の國家或いは社會の爲にもその身命をも捧げると云ふやうな立派な志を懷いだいて居り又之を實行する人物となりますと果して澤山たくざんにあるでありまじやうか。而かして又人格者や人材をば養成する學校はありましても、後に申しましたるやうな人物をば養成しまする學校となりますると遺憾いかなながら私は未だ之を聞かないのであります。

そこで我々は斯かる人物を養成しやうと云ふ所から「士」と云ふ文字の上に特に『國』と云ふ字を加はへたのであります。此の『國』は英語のナショナル或は又『國粹』と同じ意味で、かの角觥つがひ^{*}が日本國獨特の競技であります所から之をば『國技』と稱しますると同じ理由に基づくのであ

ります。即ち我が日本國に限りて他國には無いやうな眞の國家を思ふ大人格者*2をば養成したいのであります。

*1 角觚すまう

本来は「かくてい」と読む。もともとは力や技を競べる競技を意味するが、転じて相撲を指す。

*2 眞の國家を思ふ大人格者

これは國士館が養成しようとする「國士」についてのもっとも簡潔な定義である。

所で又その國獨特の人格者と申しますると御承知の如く英國にもゼントルマンと申すものがあります。此のゼントルマンと云ふ言葉は何づれの國語にも翻譯の出来ないものでありまして、日本でも之を紳士と譯やくして居りますが、是れも決して適切ではありません。寧ろ支那人の所謂『君子』が之に稍やや近い意味を持つて居るかと存じます。けれども此のゼントルマンの意義は君子とも又大に違つて居るのであります。鳥渡一言ちよつとでは説明が出来ないのでありますが、之に就ては能く知られて居る話があります。或る英國の少年が母親に向かひまして、『ママ・ゼントルマン』とは如何ドウ云ふ人を云ふのですかと聞きました。するとその母親は『ゼントルマン』とは『ゼントル』即ち優し

いマン即男らしい人を云ふのでありますと答へました。是が一番その解釋として要を得て居ると云ふ事なのであります。して見ると吾々の所謂國士と同様、立派なる人格者*1を稱するのであります。けれどもゼントルマンは紳士とも譯されて居ります通り、多少資産もありその身成りも立派でなければなりません。吾々の云ふ國士はたとへ貧乏であらうがその着けて居る衣服などは見すばらしからうが、そんな事はチットも構はないのであります。心さへ美しくあれば可い*2のでありますから私は國士の方がゼントルマンよりも遙はるかに優まつて居ると存じます。私は兎に角今日我が國に於きまして最も必要なのは國家或は社會の爲めに自己の利益をば犠牲に供しても意としないと云ふやうな眞に愛國的精神*3に満ちて居る人格者でありまして、即ち吾々の所謂國士をば政界は勿論實業界にも教育界にも宗教界にも或は又労働界にも澤山に欲しいのであります。

*1 立派なる人格者 これも「國士」の実に端的な定義である。 *2 心さへ美しくあれば

可い 「國士」、人格者の定義が富貴にかかわるものでないことを指している。

*3 愛國的精神 ここでは期待される「國士」像を、自己犠牲も惜しまない愛國精神にあふれる人

物と説明している。

そこで今日我が國に於ける眞の國士とも稱すべき人格者は決して無い譯わけではありませぬが、現に此の國士館の創立に關して至大なる援助をせられました所の今此の席にお出でになる頭山先生の如きは確かにその好典型であると存じます。

私は斯かる見地からしまして此の國士館に對し満腔まんきやうの賛意を表しますと同時に淺學ながら教鞭の勞を喜こんで執とらうと思ふのであります。

今日はほんの唯校舎が出来たばかりなだったので、その新築式を舉行致しまするに過ぎないのであります。愈よよ學生を全國から募集しまして國士たるべき人材を養成致しまするのは將來の事に属して居るのであります。就てはどうか皆様方の御賛助を得まして將來健全なる發達を遂げまして再び今日御列席を辱はづかしふ致しましたる皆様と共に五年或は十年の後に此の同じ講堂に於て名譽ある紀念會を催ほしまする事が出来ましたならば如何計り愉快でありませうか。吾々同人は一にその日の到来を切望する次第であります。^{*1}

*1 その日の到来を切望する次第であります 財団法人國士館開館式典に学長として、一〇年後飛躍を期して挨拶した長瀬鳳輔は、大正一五年七月七日、その日を待たず逝去した。

七 大正八年一月 財團法人國士館寄附行為（法人移管資料）

財團法人國士館寄附行為^{*1}

第壹章 目的

第壹條 本財團法人ハ國士タルノ人材ヲ養成スルヲ目的トス

第貳章 名稱

第貳條 本財團法人ハ國士館ト稱ス

第參章 事務所

第參條 本財團法人ノ事務所ハ東京府下荏原郡世田ケ谷村字世田ケ谷千六番地ニ置ク

第四章 資産ニ關スル規定

第四條 柴田徳次郎、侯爵小村欣一ヨリ寄附シタル國士館現在ノ不動産ヲ別紙目錄ノ通本財團法人ノ資産トス

本財團法人ノ會計年度ハ毎年四月壹日ヨリ始まり翌年參月參拾壹日ニ終ル

第五條 本財團法人ノ資産ハ理事之ヲ管理ス

第五章 役員ニ關スル規定

第六條 本財團法人ニハ七名以内ノ理事ヲ置キ法人ノ事務ヲ處理セシム

理事ハ互選ヲ以テ分担事務ヲ定ムルコトヲ得

第七條 本財團法人ニハ參名以内ノ監事ヲ置キ事務ヲ監査セシム

第八條 本財團法人設立ノ際ハ長瀬鳳輔 侯爵小村欣一 阿部秀助 柴田徳次郎 花田大助ノ五

名ヲ理事トシ 山崎源二郎 森俊藏ノ弑名ヲ監事トス

第九條 理事及監事ノ任免ハ評議委員會ノ決議ニ依リ之ヲ定ム

第十條 理事及監事ノ任期ヲ參ケ年トシけつゐん缺員ヲ生シタル場合ニハ評議委員會ニ於テ之ヲ選舉ス

補缺役員ハ前任者ノ殘任期間ヲ以テ其任期トス

第十壹條 本財團法人ニハ參拾名以内ノ評議委員ヲ置ク

第十貳條 評議委員ノ任期ハ終身トス

第十參條 本財團法人設立ノ際ハ寺尾亨 濱地八郎 根津嘉一郎 長瀬鳳輔 侯爵小村欣一 山崎

源二郎 森俊藏 阿部秀助 柴田徳次郎 花田大助 松田道一 渡邊海旭 飯田延太郎

松野鶴平 佐藤正ヲ評議委員トス

評議委員ハ本財團法人ニ關スル重要ナル事項ヲ決議ス

第拾四條 評議委員ニ缺員ヲ生シタルトキハ本館ニ於テ候補者ヲ指名シ評議委員會ノ決議ヲ經テ之ヲ選任スルコトヲ得

第拾五條 評議委員會ノ決議ハ出席委員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス 但會議ニ出席シタル委員過半数

ニ滿チタルトキハ決議ヲ爲スコトヲ得

第拾六條 本財團法人ニハ顧問五名ヲ置ク

第拾七條 顧問ノ任期ハ終身トス

第拾八條 本財團法人設立ノ際ハ頭山滿 野田卯太郎 子爵田尻稻次郎ヲ以テ顧問トス

顧問ハ評議委員會ノ諮詢しじゆんニ應ヘ本財團法人ニ關スル重要ナル事項ヲ審議ス

第拾九條 顧問ニ缺員ヲ生シタルトキハ本館ニ於テ候補者ヲ指名シ評議委員會ノ決議ヲ經テ之ヲ選任ス

第六章 附則

第貳拾條 本財團法人ノ寄附行爲ハ評議委員半数以上ノ同意ニヨリ文部大臣ノ認可ヲ經テ變更スルコトヲ得

大正八年拾壹月六日

財團法人國士館設立者

柴田徳次郎

小村 欣一

* 1 財團法人國士館寄附行為 財団法人化に向けて作成された寄付行為の手続き書類である。

* 2 國士タルノ人材ヲ養成スル 寄付行為の第壹条に法人設立の目的として明示された文言である。

* 3 侯爵小村欣一 財団法人設立に際し、柴田徳次郎とともに申請人となった。第一次第二次桂太郎内閣で外相を務めた小村壽太郎の長男。

八 大正一五年一月 柴田徳次郎述『國士館と教育』

◎國士とは

國士とは悟った者

悟った者とは、例へば將棋の駒の歩の成った様なものである。

将棋の駒の、飛車とか角とかは其の數に限りがある。併し歩は澤山ある。

頂度チヨウド國家の大臣は十名かそこらで、限りがあるが、一般國民は五千萬でも、六千萬でも差支へない様に、

又學校なら教師には限りがあるが、生徒では誰でもあり得る。

又軍隊では、將校には制限があるが、一兵卒では誰でもあり得る。

それでは歩はつまらぬものかと云ふに、どうして、なか／＼、この歩が一度び成つたら、大變な働きをする。

大臣必ずしも羨む必要はない。一無名ムメイの平民でも、悟つた者は、獨得の天地がある、働きがある。學生でも、兵卒でも、會社の一社員でも同様である。

地位や職業は何であつても、相當に練れた智慧を持つて、時と場所とに應じて、人も信じ、我も安んじる事の出来る者國士である。

◎國士館の主義*1

一言に盡すと

殉國の精神である。

(何時でも、國の爲め、命を悦んで投げ出す)

其の内容は、

誠意

勤勞

見識

氣魄

の四つである。

誠意とは、親切である。

勤勞とは働く事である。

老人、子供、病人等が、身の不如意に泣いて居る事を思へば、壯健な者が、働く事の出来るのは「有り難い事」である。實に勤勞は壯健なる者の「特權」である。

而も、自分は何時でも働く氣だ、といふ氣丈^{キダ}では不可^{イカ}ぬ。勤勞を實際にやった經驗と、自信とがあつて、いざと云ふ時には、自らシャベルを採り、鋤^トを執つて「この通り」にやるのだ、と少くとも十人二十人の労働者の頭分位には成り得、又労働に對して如何に骨が折れるかと云ふ、理解と同情とが、有る様でない、と、將來の教養ある紳士とは云ひ難い。

見識とは、昔は威張る事になって居るが、そうではない。正しい理解力である。

人は何と云つても、自分は「かく見る」と天下舉つて云ふけれ共、自分は「かく信ずる」と云ふ「正しく物事を理解する智慧」即ち「理解力」を持つ者は鮮い。

氣魄と云ふのは、責任を盡すことによつて、次第に養はれる「心の強さ」「信念の力」である。夜、よく眠つて置けば働く時元氣であり、食事時に、食ふて置けば、學ぶ時樂である様に、せねばならぬ事を常にやつて行けば、何時、何處で、何事に遇つても、平然として處置される。

昔の傑い坊さんや、英雄、偉人達は、平素から何時死んでもよい覺悟で、眞劍にやつて居るから、首の座に据へられても「歸するが如し」で従容として義に就いて行つたのは氣魄である。この誠意、勤勞、見識、氣魄が一つに練り合つたものが、即ち殉國の精神である。

津田三藏が、露國の皇太子を斬つた様な、動機は愛國でも、結果に於て、國家の損害を招く様な事は、見識が無いからであり、外務省が、卑屈至極にも青島を投げ出した様な、口では列國の誤解を解く爲めと云つて居るが、結果に於て、非常なる外國の侮辱を受けた事は、氣魄が無いからである。

動機も愛國であり、結果も愛國でなくては殉國の精神とは云ひ難い。其の爲には、即ち、見識、氣魄の内容が、國際的日本人としては特に重要である。

更に、誠意、勤勞、見識、氣魄を内容とした殉國の精神は如何にして養ふか。

それは、不斷に

讀書

體驗

反省

を勵むのである。悟りの道順と同じである。

讀書とは、

善き書物を讀む事である。先輩友人の善言嘉語ゼンゲンカゴを聞く事である。世の中の事、自然の現象を、心を込めて觀る事である。試験の間に合せや、誤間ゴマかしでなく、眞に理解する迄やるのである。

而して、善いと感じた事は、直ちに實行する。

之が、

體驗である。

善いと思ふ丈けで、實行せないのは、まだ眞に感じたのでない。眞に理解したのでない。讀書して得た事は、實際身に行ふ。即ち、體驗したら、これが思ふた通りに、善い結果になったか如何か、じつと瞑目メイトシして考へて見る。

反省である。

反省して見ると、思ひ通りにやれる事もあれば、思はぬ結果を見る事も多い。

そこで又讀書する。實行する。考へる。之も晝も夜も、遊ぶ時も、働く時も、常に怠らずに繰り返す。根氣よく勤め抜けば、自分位の資質ウマレツキなら、も一度生れて來ないでも結構、自分としては、遺憾の少ない人生を働き通して居ると云ふ信念、安心が自然と湧いて、人を咎めず、天を恨まず、誠意の智者、勤勞の勇者と爲り、殉國の活精神が躍動して來る。

* 1 國士館の主義 大正一五年一月四日に発行された柴田徳次郎述『國士館と教育』に収載されている。國士館は前年、中學校令にもとづき中學校を設置したのに続き、この年、學校令にもとづく夜間の商業學校を開設、一月には創立十周年の記念祝典を迎えていた。同書は、これにあわせて刊行されたものである。